

仁丹の町名看板をよすがに京めぐり

藤田眞作 著

湘南情報数理化研究所



プロフィール

藤田眞作「ふじたしんさく」。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。著書は「Symmetry and Combinatorial Enumeration in Chemistry」(Springer-Verlag, 一九九一)、「Computer-Oriented Representation of Organic Reactions」(Yoshioka-Shoten, 二〇〇一)、「IATFX 2e フォントバンク」(ソフトバンク、二〇〇三)、「Organic Chemistry of Photography」(Springer-Verlag, 二〇〇四)、「Diagrammatical Approach to Molecular Symmetry and Enumeration of Stereoisomers」(Kragujevac, 二〇〇七)など。また、化学構造式の描画ソフトウェア XMTEx (キムテムテク)、IATFX 用の縦書スタイルファイルなどを開発し、無償配布。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主催。

取材協力

安福由貴実	キユー・コレクション
小野英治	スタジオ エスペランサ
若杉収子	Wakasugi Planning Office
郡司かおる	森下仁丹

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」

© 2007 藤田眞作 <http://xyntex.com>

はしがき

大扉の裏に記した経歴でわかるとおり、合計でちょうど二十年、京都に住んだことになりました。とくに前半の十年は、鞠小路近衛の吉田西寮から始まって、東大路近衛の吉田寮、吉田二本松町、釜座御池、浄土寺真如町。ずいぶん、転居したものだ、今更ながら思います。後半の十年は、猪熊十条で、さすがに一箇所に定住しました。

釜座御池に下宿したときなどは、御所を抜け、荒神橋を渡って、京都大学の吉田キャンパスへ通っておりました。自転車京都の街中を走りぬけるのですが、途中、辻々で瑛瑠引の仁丹町名看板が目につきました。なにしろ、よそ者ですから、京都に土地勘はなく、通りの名前は全くわからなかった。大きな字の町名看板には、何度も助けてもらいました。

二十五年後、縁あって、京都に職を得て、もう一度住むことになりましたが、市電が全廃されるなど、京都の町も随分、変わっていました。いわゆるバブル期に古い町家が壊されて、鉄筋コンクリート作りの事務所やマンションに変わっておりました。久しぶりに戻ってきた身には、よき時代の町並みが消えていることが、ことさらにさびしく感じられました。

町家がどんどん壊されていて、そこにはあった仁丹町名看

板が消えていることも随分ありました。しかし、新しい家に変わっても、町名看板を貼り直しているところも、またたくさんあります。もともとは宣伝のために貼った町名看板が、堅牢な造り故に八十年以上も残り、伝えられてゆくのをみると、もはや、京都の文化の一部になっているといえましょう。

十年前に京都に戻ってきたときに、健康のために、週末に京都市街を歩くことにしました。好きな和菓子を求めて、歴史探訪を兼ねて、五キロメートル以上は歩くこと、ついでに仁丹の町名看板を探すことを目標にしました。この散歩のなかでは、方丈記にある「安元の大火」の火元「樋口富小路」を探し当てたこと、いまはない「樋口小路」を括弧書きで記した町名看板を見つけたことが、いちばん印象に残っています。

今年になって、大学の同窓会がありました。同じテーブルにすわった同窓の加藤正雄さんに「安元の大火」と仁丹の町名看板の話をしましたら、この話を、知己の森下仁丹の社長さんに取り次いでくださいました。しばらくして、「森下仁丹の広報誌に、仁丹の町名看板探訪記の記事を載せたい。その案内役になってほしい」との話が飛び込んできました。ひよんなことから話が進んで、九月中旬に現地ロケを敢行し、十一月号に記事が載るといって段取りになっています。

案内役の責任もありますので、多少下調べをしました。現今はインターネットがありますので、便利になりました。すると、仁丹の町名看板に興味をもっておられる方がかなりあることがわかりました。これらの方々の記事は、実地の調査に抜けをなくする上で大変に役に立ちました。匿名の場合が多いので、名前をあげ

ることはできませんが、ここに記してお礼を申し上げます。また、文中で、江戸時代の旅行案内記『都名所図会』などから引用してありますが、これらの引用は国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」に収録された文献およびその翻刻文に基づいています。このような便利な索引エンジンを作られた国際日本文化センター各位に、敬意を表するとともに篤くお礼申し上げます。調査のため京都に行った夜に、行きつけの飲み屋「味呂」で、町名看板の話をしましたら、おかみさんや常連の方々から、いろいろな情報を送っていただきました。篤くお礼申し上げます。現地口ケで、遅れがちなわたしをいたわりつつ、同行していただいた皆さんにもお礼申し上げます。文中に謡曲の詞章を引用したところがありますが、『観世流百番集』『観世左近、五十四版、檜書店、一九七六』および『謡曲集』上下（横道萬里雄、表章校注、岩波書店、日本古典文学大系、一九六〇）によつています。また、和歌の引用は主として、『合本 八代集』『久保田淳、川村晃生編、三弥井書店、一九九六』によつています。

この調査の中で、森下仁丹の広報誌「仁丹堂」に載せきれないくらい、たくさん資料が集まりました。そのまましておくのももったいないので、「仁丹堂」の記事の詳しい版としてまとめることにしました。それが、この「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」です。みてのとおり与太話に類する話がほとんどですが、酒の肴にお楽しみください。

二〇〇七年十一月

神奈川の片田舎にて、藤田眞作

第1回 方丈記・樋口富小路の謎

「安元の大火」の火元

受験勉強はだれしもうつつとうしいもの。いまだに「解答できない、どうしよう」という試験場での悪夢を見ることがあります。わたしが大学を受験したころは、理科系といえども古文を履修することになっていました。定番は、方丈記、徒然草など。嫌々学習していた古文の中で、ずっと気になっていることがありました。それは、鴨長明「かものちようめい。一一五三―一一二六」の名を音読みにすることを有職読みというのだそつです。恥ずかしながら、ながらく知りませんでした」の「方丈記」の中の一節です。鴨長明が平安時代から鎌倉時代への転換期におこった変事をあげている中に、安元の大火（一一七七年、安元三年、八月に改元して治承元年。ちなみにこの年の六月には、俊寛僧都の鹿ヶ谷陰謀が発覚しています。）があります。その箇所を引用してみましよう。

いんし安元三年四月廿八日かとよ。風はげしく吹き
て、静かならざりし夜、戌のときばかり、都の東南より
火出で来て、西北に至る。はてには朱雀門・大極殿・大
学寮・民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となり
にき。火もとは、樋口富の小路とかや、舞人の宿せる飯

屋より出で来るとなん。

『方丈記徒然草』岩波古典文学大系、西尾實校注（一九五七）
ただし、旧字体を新字体に変更したところがある。

この「樋口富小路」とは、現在の京都市のどこなのだろうか。詮索しても天下の大勢にはかわりがありませんが、これを皮切りに、仁丹の町名看板を手がかりにして、無駄ばなし、与太ばなしを重ねながら、京都の辻々を歩いてみようというのが、このシリーズもくろみです。

それは万寿寺富小路か？

まず突き当たる謎は、樋口小路が現在の京都地図ないこと。この謎ときは簡単で、平安京の復元地図には載っていることがすぐわかります。復元地図を仔細にみると、樋口小路は、現在の万寿寺通にあたるとあります。

現在、万寿寺（正式には万寿禅寺）は、東大路が九条通りに曲がる陸橋の手前、第一日赤病院の斜向かいにあります。古くは「左京六条四坊三町」の地にありました。この遺跡の一部（下京区五条通間ノ町東入ル）が、ごく最近京都市埋蔵文化財研究所の手で発掘されて、庭園の跡などが出現しています。遺跡説明会の資料に使われた「上杉本洛中洛外図屏風」（一一五七四年に織田信長から上杉謙信に贈られたと伝えられる）の万寿寺の部分を図1・1に引用します。

万寿寺の前身である六条御堂は、白河上皇が、嘉保三年（一一〇九六年）に、皇女の冥福を祈って、その御所である六条内裏の中



図1・1 上杉本洛中洛外図屏風部分（万寿寺・五条橋）。
 （旧万寿寺遺跡説明会の資料、インターネットブログ「歴史ロマン探検隊」から一部切り取って引用）

に建立したものです。六条内裏は、東は高倉小路、西は東洞院大路、北は、六条坊門小路（現在の五条通）、南は六条大路に囲まれた一角にありました。その北端は、不思議なことに、現在の万寿寺通に面していません。面しているのなら、樋口小路が万寿寺通に変わった理由になるのですが、そうならない。またまた、詮索好きの虫が動きだしてしまいました。

万寿寺の年譜をみると、一三三〇年（元徳二年）に報恩寺が万寿寺北の地に開かれ、さらに一三四〇年（暦応三年）に万寿寺と報恩寺を合併したとあります。多分、このときに、敷地の北端が万寿寺通に面したのでしょう。万寿禅寺として京都五山に列したのはそのあとの一三五八年（延文三年）ですから、敷地が広がったあとに有名になって、現在の通りの名前として残ったと考えれば辻褄があいます。

『洛中洛外図屏風』の赤丸で囲んだ建物が万寿寺です。その上に、五条橋（現在の松原橋の位置）が描かれていますが、当時は中州によって二つに分かれているのが興味ぶかい。万寿寺の左側に描かれているのは、因幡薬師（平等寺）とおもわれるので、この図の位置関係から推測すると、屏風の作られた時代には、万寿寺の北端が、樋口小路（現在の万寿寺通）に面しているらしいことがわかります。

現在の万寿寺富小路の十字路の西北角に、仁丹の町名看板「富小路通萬壽寺上ル本上神明町」①、東南角に「萬壽寺通富小路東入本神明町」②があります。わたしの詮索の虫も満足したので、一時期、安元の大火の火元はここだと堅く信じておりました。



富小路通 萬壽寺上ル 本上神明町 ①



萬壽寺通 富小路東入 本神明町 ②

ほんとうの火元は万寿寺麩屋町

ところが、これで一件落着とはゆかない。平安京の復元地図と現在の地図を重ね合わせると、富小路が西にずれていることに気がついたときは、さすがにおどろきました。なぜ、こんなことになったのか。

これは、わたしが知らなかっただけ。旧富小路が麩屋町通に変わったのは、天正の地割(一五九〇年、天正十八年)が原因です。もともと、平安京の地割の最小単位は一町で、正方形の敷地です。貴族の大邸宅や寺社などが、この一町を占めるときは問題がありませんが、分割して利用するとなると、通りに面したところだけに町家が建ち、中央の部分に空地ができます。南北の通りを追加して短冊形にし、通りに面する部分を多くする都市改

ここで、仁丹看板の町名表示について、念のため書き添えましょう。京都はおおむね碁盤状になっているので、南北の通りの名称と東西の名称を組み合わせて場所を示します。このとき「通」を付けた道筋に該当の場所があることになりました。通常「通」をつけた通りを、東西、南北にかかわらず、先に書きます。

たとえば、最初にあげた町名看板「富小路通萬壽寺上ル本上神明町」①の場合は、南北の富小路通に面していることになりました。上ル「あがる」は北へ、下ル「さがる」は南は、西入ル「にしている」は西方向へ、東入ル「ひがしている」は東方向へそれぞれ移動したところを差します。したがって、この例では、富小路「通」を上ル(北へゆく)ことになりました。もう一つの町名看板も、この原則を忠実に守っていることがわかります。

そのあとに町名(この例では本上神明町)を書き加えます。京都の町名は、だいたい両側町(道筋を挟んだ向かい側とが一つの区域になる)をあらわすようになっています。ここでは、富小路を挟んだ万寿寺通より北側の地域が本上神明町、南側の地域が本神明町です。東京などの町名番地がブロックごとになっているのと異なっています。

仁丹町名看板の所在（安元の大火の火元 付近）



造が、豊臣秀吉によっておこなわれました。これが天正の地割でされたのが、現在の富小路通です。旧富小路は名前が変わって麩屋町通になりました。また麩屋町押小路にある白山神社にちなんで、江戸時代には、麩屋町通を白山通と呼ぶこともあったようです。旧富小路と東京極大路（今の寺町通）の間の南北には、御幸町通が追加されました。万寿寺は、この改造に連動して、一五九一年（天正十九年）に、東福寺塔頭に格下げ移転しています。

麩屋町通万寿寺上上鱗形町 ③



そんなわけで、方丈記の「樋口富小路」は、現在の万寿寺麩屋町なのです。万寿禅寺が移転させられたのも、富小路が麩屋町に改名させられたのも、もとはといえば豊臣秀吉のせい。まったく、太閤さんは罪作りなことをなさる。

この辻の北、お地藏さんの祠のそばに、仁丹の町名看板「麩屋町通万寿寺上上鱗形町」③を見つけました。お地藏さんの祠（京都では、「地藏盆」が子供のための行事として、町内をあげておこなわれます）と仁丹町名看板の組み合わせも、京都ならではの風景です。「安元の大火」の火元を、やっと、さがしあてたということで、記念撮影をいたしました。お見苦しいことは承知しておりますが、仁丹町名看板の概略の寸法を示すためにあえて載せたものですので、ご容赦のほど。ちなみに、わたしは中肉とは申しませんが、中背でございます。それにしても、「なぜ旧富小路を麩屋町に変えたのか」という謎は残ったままです。

京都の大火

安元の大火は、太郎焼とも呼ばれます。おおよその焼失区域は、東南は火元の万寿寺麩屋町、西北は千本丸太町を対角線とす



「安元の大火」の火元で記念撮影

る矩形の範囲です。千本丸太町付近は、かつては大極殿など多くの官庁があったところで、そのほとんどが焼失しました。方丈記には触れられていませんが、翌年の一一七八年（治承二年）にも、次郎焼亡と呼ばれる大火がありました。この大火は、七条東洞院付近から出火して、七条大路沿いに朱雀大路まで達しました。太郎は愛宕山太郎坊、次郎は比良山次郎坊のことで、両大天狗が相計って、悪さをしたということで名付けられたものです。この二つの大火は、貴族政治から武家政治への移行する象徴的な事件で、安元の大火の際に焼けた政治中枢の建物は、二度と再建されることはなかったのです。

このうち、京都は何回かの大火にみまわれます。江戸時代に限っても、宝永の大火（一七〇八年、宝永五年）、天明の大火（一

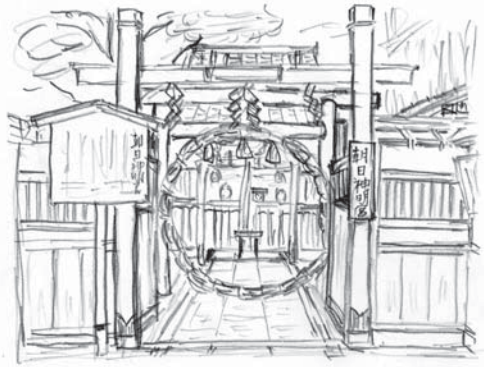
七八八年、天明八年）、どんだん焼け（一八六四年、元治元年、蛤御門の変）などがあります。そのたびに、市街地の再編成がおこなわれており、痕跡が地名に残っています。

朝日神明宮にも謎がある

件の万寿寺鞍馬町の十字路から南に下がったところに、朝日神明宮（下京区鞍馬町五条上ル下鱗形町）があります。駐車場の南、南隣りにビルが迫った狭い境内ですが、よく手入れが行き届いていることがわかります。通常は、無住のようですので、どなたか定期的にご奉仕する方がいらっしやるのでしょうか。

社伝によれば、祭神は天照大神。わたしのつたない鉛筆画をよく見るとわかるように、祭神に心じて、円柱の笠木を乗せた神明鳥居です。神社（元龜三年（一五七二年）に遷座したと伝えられる）のかつての境内は、南北は五条通から松原通、東西は河原町通から富小路通に至る広大なもので、「幸神の森」と呼ばれました。天明の大火（一七八八年、天明八年）およびどんだん焼け（一八六四年、元治元年）によってその大半が焼失し、八つの末社のうち、猿田彦社（幸神社）ただ一社だけが残るのみと、鳥居前の駒札（正式名称は、名所説明立札）にあります。

ところが、江戸時代の旅行案内書である『都名所図会』巻之二（一七八六年、天明六年の再板本）には、現在の朝日神明宮の位置に、朝日宮があると記載されています。なんと、朝日神明宮は、もともとはこの名称ではなかったのです。またまた、詮索の虫が蠢きました。



朝日神明宮の茅の輪



朝日神明宮本殿

『都名所図会』の記載と比べると、上記駒札の社伝は、ほぼ朝日宮のものであることがわかります。駒札には、増穂残口（一六五五〜一七四二）が、『艶道通鑑』などを刊行し、通俗的な神道講釈を行なって人気を博したことが書かれています。残口は、江戸中期（一七一九、享保四年）に朝日宮社司を継いだと伝えられており、朝日神明宮の社司ではないようです。

この回のもとの版（2007/11/10）では、「ではなぜ朝日宮が、朝日神明宮に変わったのか。どうも、上述の天明の大火が関係しているようです。『都名所図会』には、朝日宮とは別に、富小路五条の北に神明宮があったとの記載がありますので、天明の大火

のあと両者が合祀されたのでしよう。仁丹町名看板にあった「神明町」は、この歴史の痕跡と推測されます。」と書きましたが、事はそんなに簡単ではないようです。

『京都市の地名』（日本歴史地名体系二七、平凡社、一九七九）の「本神明町」の項には、『京都坊目誌』（碓井小三郎編、一九一五）を引用して、富小路五条上ル本神明町の「神明宮」についての記載があります。それによれば、本神明町の「神明宮」は、天明の大火（一七八八年）とどんどん焼（一八六四年）の際に類焼しましたが、そのちも存続。明治十五年（一八八二年）に、元の有隣小学校が移転してきたため、今熊野の剣神社の境内に遷座したそうです。

実際に、今熊野の剣神社には、「朝日神明宮」があり、社殿には本神明町からの供物があります。しかし、扁額には、「神明宮」ではなくて、「朝日神明宮」と書いてありますので、またまた混乱してしまいました。

一方、『京都市の地名』の「朝日神明宮」の項では、昭和三六年（一九六一年）に旧称「朝日神社」を廃し、「朝日神明宮」と改称したとあります。混乱は一層深くなっていました。

以上をわたしなりに整理すると、元の朝日神社（社伝の元龜三年（一五七二年）の状態、境内は、南北五条通から松原通、東西河原町通から富小路通）は、朝日宮と神明宮の両社殿を含むものであったと考えるのが、現時点ではもっともらしい。元の朝日神社（朝日宮・神明宮）↓朝日宮と神明宮（分離、『都名所図会』（一七八六年）の状態）。そのあと、「朝日宮」のほうは、朝日宮↓朝日神社（時期不明）↓朝日神明宮（一九六一年改

称)。一方、「神明宮」のほうは、神明宮↓朝日神明宮(劍神社境内に遷座、一八八二年)。どうも、すっかりしないが、謎解きはこの程度にとどめておきましょう。

同じ陰暦四月に

ついでにいうと、「安元の大火」の火元の万寿寺麩屋町は、ほとんど焼け(一八六四年、元治元年)の少し前の一八五〇年(嘉永三年)に、もう一度大火の火元になっています。江戸時代のかわら版の『京都焼場方角付』には、次のように記載されています。

頃は嘉永三戌の年四月十六日ひる九ツとき、京都万寿寺通ふや町西へ入町、南がは四軒目より出火にて、折ふし西南の風はげしく、松原通へ焼ぬけ、火二口になり、東は高せ川をこへ、かも川限。西の方は柳馬場裏となり迄。高辻通は西にてとミ小路北じりまで。(後略)

小野秀雄コレクション(東京大学大学院情報学環・学際情報学部)『京都焼場方角付』(火事 No. 39)

奇しくも、安元の大火と同じ陰暦四月。同じく、南寄りの風。ときは、江戸から明治への転換期(ちなみに、ペリーの黒船来航は、一八五三年(嘉永六年)。パンパン…講談たここで張り扇がはいるところ。「嘉永三年の大火」から明治新政府樹立(一九〇八年、明治元年)まで十八年。「安元の大火」から鎌倉幕府開府(一一九二年、建久三年)まで十五年。よく似た状況で、よくもまあ、同じ場所が火元になったものです。「嘉永三年の大火」で

は、焼失の西北限は綾小路富小路を越えたところ。一方、「安元の大火」の西北限は、千本丸太町を越えたところですから、火元が同じでも、「安元の大火」がいかに大きかったかがわかります。時代の転換などと大風呂敷をひろげたあとは、例によって瑣末な詮索。かわら版には、「嘉永三年の大火」の焼失地図が載っています。朝日神明宮の所在地は焼失範囲の南限すれすれの場所です。かわら版の文面では、「市中御やしき神社多く焼」とありますので、詮索好きのわたしには、この火事で朝日神明宮が被災したかどうか気がなります。神社前の駒札が正しいとすれば、このときは被災しなかったことになるのですが(もう一つの可能性として、被災したけれども再建されて、再度どんどん焼で被災したこともありうる)。

石門心学脩正舎跡

朝日神明宮の門前に、石門心学脩正舎跡の石碑が建っています。石門心学は、石田梅岩(一六八五—一七四四)が始めた処世哲学で、神儒仏の三教を平易に説いて、町人農民に大きな思想的影響を与えました。脩正舎は、その弟子手島堵庵(一七一八—一七八六)が東洞院松原に開いた心学講舎で、天明の大火など焼失、移転を繰り返しました。心学者柴田鳩翁(一七八三—一八三九)が、五条東洞院に脩正舎を再興、鳩翁の孫謙堂(一九一一年(明治四四年))に、この石碑のある麩屋町通五条上る東側に移し、学統を伝えました。

石門心学の話題になったついでに、ちょっとした感想。日本人



石門心学脩正舎跡の碑（駒札は朝日神明宮のもの）

は無信教だとよく言われますが、むしろ逆で、無意識の中に、宗教的なもの——神教とは異なる寛容な信仰心——を色濃くもっているように思います。この宗教的なものの一つのみかたが石門心学で、これに近い心情が、おしなべて日本人の基底にあるような気がします。

明王院不動寺——石不動

松原駄屋町東南のかどに、明王院不動寺（通称、松原不動、石不動）があります。『拾遺都名所図会』巻一（一七八七年、天明七年）では、「南岩倉石不動」として紹介しています。寺伝では、



明王院不動寺——石不動

持統天皇の朱雀五年に道観大徳が開き、のち平安京ができたときに、弘法大師が石像不動明王を本尊としたとあります。平安京鎮護のため四方に経王を石蔵におさめたときの、南岩倉であるとの言い伝えがあり、お堂の扁額にも「南岩倉」の文字が読めます。天曆年間に鴨川の氾濫により、一時荒廃。比叡山の僧谷筵が勅を受けて再興したと伝えられています。応仁の乱で再度荒廃し、この石像も塵芥のなかに埋もれていました。豊臣秀吉が天正年間（1593-1600）に聚楽第を造営したときに、石狩と称して、奇石を多く集めました。この石像を掘り出して、聚楽第に移したところ、夜な夜な光を放って、多くの怪異がおこったので、もとあったこの地に小堂をたてて安置すると怪異も収まった言い伝えられています。



麩屋町通松原下石不動町 ④

お堂の柱には、「西歳一生の守本尊」の札が貼られており、西年生まれの人に「利益があるとされています。ちなみに、十二支のそれぞれに、守本尊が定められており、子年は千手観世音菩薩、丑寅年は虚空蔵菩薩、卯年は文殊菩薩、辰巳年は普賢菩薩、午年は勢至菩薩、未申年は大日如来、酉年は不動明王、戌亥年は阿弥陀如来です。北(子)、北東(艮)、丑寅(東)、卯、東南(巽)、辰巳(南)、南(午)、南西(坤)、未申(西)、酉(西)、西北(乾)、戌亥(の八方角と組み合わせせて、仏様を割り当てていますが、わたしにわかるのはここまで。多くの仏様のなかから、これらの仏様を選んだ理由はよくわかりません。

おつと、どし読むか？

不動寺の西側の壁に、「麩屋町通松原下石不動町」④の町名看板があります。地図をみると、石不動之町とあり、「之」によって読みを固定して、「いしふどうちよう」と読まないようにしています。もちろん不動寺に由来した地名です。

ちなみに、「の」を入れるかどうかは、読みの揺れの範囲で、あ

まり目くじらをたてることもないという意見に、わたしも与じます。今回出てきた通りの名前についても、「富小路通」は「とみのこうじどおり」とも「とみこうじどおり」とも読むようです。しかし、さすがに「柳馬場通」は「の」を入れて「やなぎのばんばどおり」と読み、「やなぎばんばどおり」とはいわないようです。「石不動之町」の場合は、どうしても「の」をいれないという思い入れがあったのでしよう。

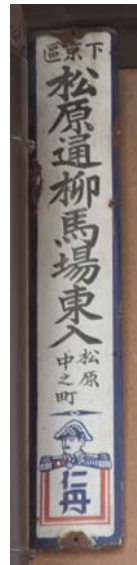
松原富小路の十字路を挟んで、松原通に面したところ二箇所、仁丹町名看板があります。二つの看板は、十字路の表示としては「松原富小路」⑤と「松原柳馬場」⑥とで異なっていますが、町名は同じ「松原中之町」です。両側町の原則に忠実にできるだけ共通部分を多く表示するならば、一番目は「松原通 富小路 西入 松原中之町」とすべきでしょう。とはいうものの、原則論を振りかざしてあげたらうのが無粋なことは、重々承知しております。むしろ、仁丹町名看板が数ある中で、町名が同じで十字路の表示が違う、めずらしい例として、記憶にとどめておいたほうがよろしいようです。

おつと、本題を忘れておりました。「の」を入れるかどうかの詮索に戻りますと、「松原中之町」⑤の場合は、「之」を入れないと、「中町」となって、「なかまち」あるいは「なかちよう」としか読めない。それで、「中之町」とするのは、順当でしょう。石不動之町と松原中之町は隣りあっているのです、もしかしたら、単に釣り合いのうえから、「石不動之町」としたと、考え直したほうがよいかもしれない。

松原通 富小路 東入 松原中之町⑤



松原通 柳馬場 東入 松原中之町⑥



読みの揺れに関しては、伸ばすか伸ばさないかの違いもありま
す。「御幸町通」は、「ごごごまちごおり」の「ご」を短縮して、
「ごごまちごおり」ともいうようです。今回は「万寿寺通」を「ま
んじゅじごおり」と読んできましたが、逆に「ご」を入れて、「ま
んじゅごごおり」ともいうようです。

松原通、万寿寺通のこの界限

松原通と万寿寺通のこの界限は、仏壇仏具屋が目立ちます。そ
のほかにも、伝統工芸の工房がたくさんあります。直接取材をし
たわけではないので、参考までということでご列挙します。「加藤
小兵衛商店」(松原通富小路西入ル松原中之町。この町名表示は、

さつき理屈をこねたとおりになっていきますね)は、漆液を需要者
(漆器、仏具、家具、建具、釣竿、和楽器) 向に精製販売。「井
助」(柳馬場通五条上ル柏屋町)は、京漆器の販売。「御弓師柴田
勘十郎弓店」(御幸町通万寿寺上ル須浜町)は、京弓。「YOUKO
KABAN」(万寿寺通富小路東入ル堅田町)は、町家でオリジナ
ルバッグ製作。伝統工芸体験工房に登録している工房をあげてお
きましょう。「榊漆工芸」(万寿寺通柳馬場西入ル堅田町)は、蒔
絵体験。「京扇子とく」(富小路通松原下ル本上神明町)は、京
扇子の手描き体験教室。「絞彩苑種田」(柳馬場通五条上ル柏屋
町)は、京鹿の子絞り工程見学。最後に京煎餅の紹介。「清水製
菓」(万寿寺通御幸町西入ル須浜町)。定番の煎餅の中では、野菜
煎餅が目と舌の両方を楽しませます。この店に、京都煎餅組合の
事務所が置かれています。

時空を超えて、京めぐり

京都は、七九四年(延暦十三年)に桓武天皇が平安京を造営し
てから東京遷都の一八六九年(明治二年)まで、約一〇〇年
間、実質的あるいは象徴的に「みやこ」であったところです。さ
らに、明治時代以降一〇〇年余りは、古い伝統の中に新機軸を取
り入れてきたという歴史があります。京都のどの地点にたえず
でも、約一二〇〇年の歴史が重層的に蓄積されています。大変好
都合なことに、古い町並みの辻々には、少なくなりましたが、い
え、まだまだ仁丹の町名看板が残っています。それをよすがに、京都
の歴史や民俗を訪ねることは、時空を越えて飛翔する感覚が味わ

え、大変おもしろい。しかも、どの界限にも和菓子屋があり、古都散策の疲れをほどよく癒してくれることが、甘党のわたしにはありがたい。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかわらわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第1回）2007/11/1

改 2007/12/20

© 2007 藤田眞作 <http://xyntex.com>

